

彼方からの夏の夢 あらすじ

「人生は泣き笑い」というけれど、映画やドラマの主人公たちのように派手な「笑い」も、大げさな「泣き」も、平凡な日常にはそうそうあるものではない。ひとには生活があり、日々の暮らしの中に胸を打つ出来事があるとしても、誰かにそれを劇的な語り口で吹聴するわけでもない。

主人公は役所で働く中間管理職である。時代の流れに沿うことが求められているのは理解しているが、安直な仕事はしたくないと考えている。語るべき特異なことはないように見える公務員人生にも、知られざる苦悩はある。

生きていれば誰にでもそれなりの出会いと別れがあり、その喜憂にも、それぞれにふさわしい帰結がある。主人公は最後に、目に映るもの、聞こえる音、薫る風を味わい、移ろいゆく「いま」という時間こそが人生の到達点であり出発点であることを知る。